

文化の差異に関する研究部会 太平洋の島嶼小国に関する研究部会

合同セッション報告

文化差研第44回セッション

島嶼研第37回セッション

『チエチエメニ号の冒険』

講師 門田 龍太郎

とき 昭和六十二年五月二十九日
ところ 赤坂ホワイトハウス会議室

司会（中島 洋） 昭和五十年七月か

ら翌年一月にかけて行われた沖繩の海洋博に、ヤップ離島のサタウルからチエチエメニ号が沖繩まで来まして、その際、門田先生が『チエチエメニ号の冒険』という映画にお撮りになって、随分多くの賞をお取りになった映画でございましたけれども、その映画の制作では、いろいろご苦労もなされたと思いますし、きょうはそういうことを

含めまして、その当時の様子をお話いただきしたいと思います。ひとつよろしくお願いいたします。

門田 サタウルとか、カヌーの航海

につきましては、本も出ておりますし、それから学術論文などもございますし、皆さま方とはつくにご存じだろうと思いますから、そういうことは省かせていただいて、きょうはどうしてこうい

うことを考えついて、こういうことをやって、どういうトラブルなりがあつたかということでお話申し上げたいと思います。映画屋としての私からみたサタウルなり、彼らというようなこととお話をしたいと思います。

これをやりましたのは一九七五年でございます。なぜこれやることを考えたかといえますと、その二年前に、サタウル島のルッパンという優秀

な航海家がサタウル・サイパン間の航海を成功させたことがナショナル・ジオグラフィックの記事に出ておりまして、ああ偉いのがいるなという認識は持っていたわけですけども、たまたま私がテレビの番組の取材で、ヤップ島に行きました時に、ロボマンという大酋長がおりまして、そのロボマンさんと毎日ビールを飲んだり、いろんなことをしながら話をしているうちに、

サタワルの人ならカヌーで日本まで行けるよという話がヒョイと出ましてね。ロボマンから「海洋博」というのがあるという話は聞いているけれども、それにサタワルの人たちをやっているかどうかね」というようなことで、「それは来れば、こんなに愉快な話はないですよ」ということですね。

それがとんとと話が進みまして、ロボマンが日本に來まして、当時の衆議院議長でありましたかね、松田竹千代先生が、面白い、ヤップの大酋長が来たんなら、飯を御馳走しようというようなことで、あの人もかなり元氣のいい人でしたから、もう亡くなられましたけれども。

じゃ、やんなさいよと、来れるんなら、といったって、どこが資金を出してくれるわけじゃなし、海洋博協会に聞いてみても、来れば歓迎するけれども、来るか来ないか、途中で沈んでしまいかわからないような話、海洋博はとてできない(笑)というような話でしたが、私もだんだんのっぴきならなくなりまして、とにかく伴走船というのがいずれにしても要るだろうと考えたわけです。

森繁久弥氏から

ヨットを借りる

ぼくは映画屋ですから、やるからにはきちんとした映画も撮りたいのでど

うしても伴走船が要るということで、漁船を使おうと思って探したんですが、日本の海運法というのは世界でも一番というぐらい厳しいんですね。たとえばわれわれみたいに船員じゃない、漁民でもないというのが乗って行くには、客船としての能力を備えなければいけない。それにはドアの高さが何メートル、幅は何メートル以下であっちゃいかんとか、すごい規制があるんです。

結局、レジャーボートを使う以外に方法はないなと。それで探しておりましたら、ちょうど森繁久弥さんが東京オリンピックの時に、ヨット競技というのは、外国の貴賓迎りが素晴らしいヨットに乗って、美味しいものを食べながら見物するような競技である。そういうヨットが日本には一隻もないんだというので、ふじや丸というのをおつくりになったんです。当時何億かかったか知りませんが。

ところがああいいう方ですから、忙しくて、世界一周できる船なんだけれども、今まで乗ったのは、大島までしか行ったことがない(笑)。もし門田さんに、そういうことに使ってもらえればこれにまさる喜びはない、ふじや丸をつくった甲斐があるということで、ちょうど森繁さんが名古屋の御園座へ出演されていましたけれども、その時の楽屋へ行ってお願いしたら、快くただで貸してやるということになりました

た。

それでやっと、これだったら、ひょっとしたらできるぞということを考えまして、湘南地方のヨット好きのブラブラしている青年を八人ばかり雇いまして、宇都宮さんという船長も雇って八人と、それからわれわれ映画スタッフフが八人、それにドクターを一人乗っけまして、お医者さんは日本で有数の、ヒマラヤの隊長なんかを務められるようなお医者さんで、住吉先生という方でしたけれども、来ていただきまして、ほとんどみんな無償で、ボランティアで始めたことなんです。

当時、ミクロネシアはまだ国連信託統治領でしてね、サイパンに政庁がありまして、忘れもしません、九月の何日かですから、横須賀の林兼造船所からふじや丸に荷物を積み込みまして、出掛けました。

出掛ける前にも一つ面白い事件があったんですがね、笹川良一さんのところのグループから、その企画を俺たちにやらせろと、そうすれば資金的バックから運動からみんなみるというような話がありまして、ぼくはそれを断ったんです。そうしたら前の日にちょっと荷物を降ろされたりなんなりというトラブルがございましたけれども、それも押し切って出掛けまして、出掛けた途端に台風九号というのにぶつかりまして、全員船酔いになりましたね。

海上保安庁の巡視艇から、すぐ下田へ入れ、もう行っちゃいかなといわれたのを、これまでして出て来たんだから行こうというので、三宅島の島陰へ待避して台風をやり過して、それから小笠原へ行っただんです。

小笠原では今度は待避勧告を受けた巡視艇がまた来ておりましてね(笑)。お前は行っちゃいかなというのに何で来たというんで、またそこで一斉に船内検査を受けました。われわれが外国で使うんだからいいだろうと思って、水中銃とか、そんなものをいろいろ積んでおったんですが、これは凶器で日本国内じゃ使えないものだって、没収されちゃったり、いろんなトラブルがありました。

サイパンのTT高等弁務官府でサタワル行きの許可を取る

そんなこんなで、一番困りましたのは、まず、グアム島に直行したわけでございますけれども、グアムでサタワル行きの、いうなれば許可といいますが、というものが取れると思っていたんですが、グアムでは取れないんです結局。グアムで一週間ぐらい停滞いたしました。

そうしまして、とにかくサイパンまで来いということになって、サイパンの高等弁務官事務所へ出頭しましたら、高等弁務官はアメリカ人だったんです

が、サイパン人の、チャモロ人の副弁務官みたいなのがいまして、とにかくこれが許可をくれないんですね。というのはどうなのか、本当に海洋博へ連れて行くのか、それについてはお前たちはインビテーションを持っていないじゃないか、お前たちは純粋な島民をだまぐらしかして日本へ連れて行って、サーカスにでも売るのがかと、こういう感じですよ（笑）。

これを説得するのに、本当は金欲しかったのかもわかりませんが、これも、こっちはそういうお金は持っておりませんので、とにかくもとに当たるしか方法はないというんで、これまた一週間かかりました。サイパンに一週間停泊しておりました。毎晩毎晩、船上でパーティをやりまして、地元の名士を招んで、こういうわけであいうわけだやって（笑）、結局、一週間たつてなんとか行ってもいいということになったんです。

それからヤップ島に行きまして、ヤップ島は、ロボマンさんがいたものから、これはなんのトラブルもなく、すぐ出港をさせてくれましたけれども、私はサタウルに着くまでルッパンとは一面識もないわけです。ロボマンとだけずーっと話をしたわけで。

ですから、ルッパンという男はどういう男で、サタウルという島はどういう島というのは全く見当がつかずに

行ったわけなんです。サタウルという島は裾礁に囲まれています。船はその中に入れないので、風下側に当たる島の西南側の裾礁の近くに停泊するわけですが、ルッパンたちがリーフの外まで迎えに来てくれています。停泊する位置を教えてくださいました。

人口約五百人の サタウル島

いろんな方が書かれた論文やなんかによりますと、サタウルには六つの航海者の家系があると書いてございますけれども、本当の意味での大航海者の家系は二つしかないと思います。あとは近くのウェスト・ファイユ（West Fayu）辺りに亀を採りに行ったり、魚を採りに行ったりする程度の航海で、その一つというのはもちろんルッパンでありますし、もう一つはピアイルク（ピアイルクとも）といいましたか、米国の建国二百年の時にハワイからタヒチまでの航海をやった男ですけれども、これがルッパンよりは十歳ぐらい若い男です。この二つの家系がどうも、いってみれば完璧な航海者だった人の家系のようでございますね。

なんかその時でも、われわれが沖縄へ行く、彼らはタヒチ・ハワイ間をやるんで、互いに対抗意識を燃やしていましたけれども、非常に彼らもよくしてくれました。

サタウルの人たちの生活というのは映画にも多少出ておりますけれども、毎朝日の出とともに起きてきて、全員、海に入るんですね。これはどうも下の用を足すためらしいです。下の用を足すのと、顔と身体を洗うというので、全員海に入ります。これは薄暗いうちから海に入っていますけれども、それから上がりまして、男は椰子酒をつくりに行くんです。

各自、二十本とか、三十本とかという椰子を、それぞれ個人の所有で持っていますから、そのうちの三本とか四本とかを、これは完全にお酒用に使うんですね。で、椰子の芽を切りまして、その切ったところへ、縄といまして、これもやっぱり椰子の実の繊維からつくる縄ですけれども、それを巻きまして、その先端に椰子の実でつくった器、殻ですね、あれを結び付けておきますと、大体朝八時ごろやりますと、ポタポタ落ちてきて、夕方の三時ごろにはお酒になるんです。椰子酒。それをつくりに行きます。

それから女たちは必ず海岸の砂、珊瑚のかけらを拾って来ましてね、これを自分のうちの中に撒くんですね。置替えみたいな感じで、これを撒くと非常に奇麗に、カサカサして乾いて、気がいいんで、それを毎日やります。それから女たちは、タロイモの畑に出掛けるわけですけれども、サタウル

という島は、大体、周囲六キロくらい、の空豆みたいな形の島なんですけれども、人口は、四百九十何人とか、大体、五百人とお考えになっていいと思います。一番高いところで、せいぜい海面から四、五メートルぐらいしかないんですね。こういう島です。幅が広いところで二キロ足らずでしょうか。狭いところは何百メートルというぐらいの感じですよ。

海岸がありまして、海岸のすぐ側に椰子の木がありまして、その奥にパンの木があるんです。非常に高いパンの木です。普通のパンの木というのは、アフリカでもどこでも大体十メートルそこそこですが、このパンの木というのは二十メートルぐらいあります。非常に大きいパンの木です。島の真ん中は少しくぼんでいります。ここがタロイモ畑になります。反対側にもパンの木があって椰子木が海になる、と大体、こういう地形ですね。

流木の下を魚を獲る

彼らの主食というのは、タロイモとパンの実と、それから椰子ですね。椰子のコプラ。それから魚です。それから豚も飼っておりますけれども、これは大変貴重な食料で、普通の時に食べるものじゃなくて、お祭とか、お祝いの時に殺すようなものなんです。

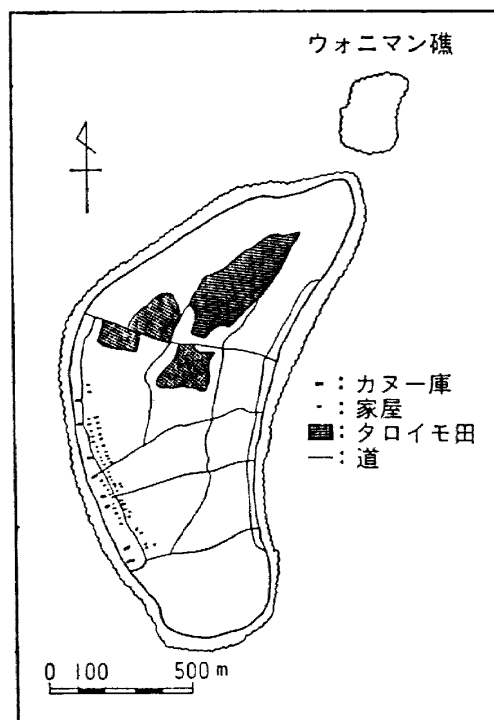


図1 サタウル島〔須藤健一 “Social Organization and Types of Sea Tenure in Micronesia” (In) K.Ruddle and T.Akimichi (eds), *Maritime Institution in the Western Pacific*, Senri Ethnological Studies, No.17. より〕

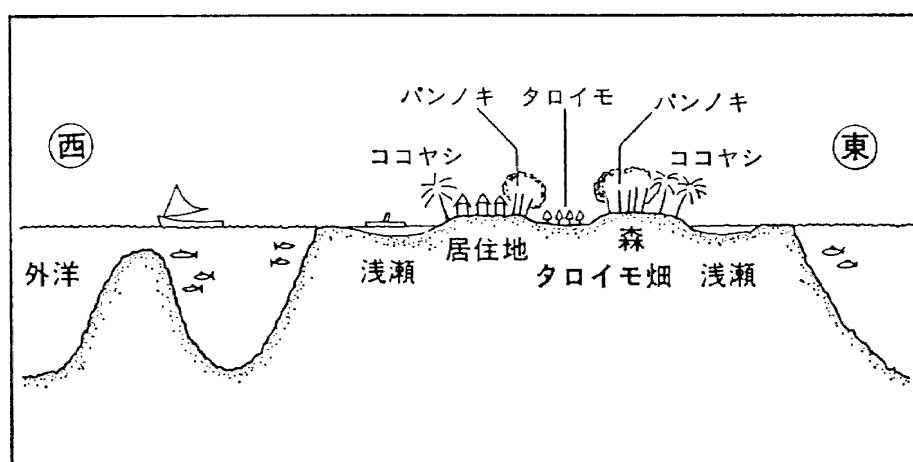


図2 サタウル島の断面図〔秋道智彌 「サンゴ礁の島——食料資源の保護と利用考」,『季刊民族学』四巻三号より。〕

朝、水浴を終わって、家の回りの掃除が終わると、女たちはタロイモ畑に行って、終日、タロイモを採ったり、終日といいますが、一日二、三時間も働けば、もうそれでいいというような生活ですから、タロイモ畑へ行く。で、自分たちの食糧を生産する。

男は椰子酒をつくりに行き、それから漁に行くといいですか、海岸で海のほうを見ているんですよ。みな海岸に座って、海のほうを見ているんです。なぜかという、流木を探しているわけですね。流木の下についている魚を獲るといのが彼らとしては一番効率のいい漁業なものですから。目は素晴らしくいいです。戦争中、日本海軍がこの辺の男を徴用して、補助艦艇に乗付けて、見張りをやらしたというようなことがあるぐらい、目は非常にいい。

で、沖合に流木があると、それについていってカヌーを出して、流木の下に必ず魚がいますから、それを獲りに行くというようなことをやっております。

それから私もがいた間に、漁で見たのは、日本の地引き網といいますか、タヒチの漁と似ているんですけれども、長いロープに、たくさん椰子の葉をつけるんです。これをやっぱりカヌーで回して、引っ張ってくる。日本の地引き網のようなものです。しかし、椰子

の葉っぱの威しをたくさんつけたもので、そういう漁もやっていますけれど、まあ、主としてやっぱり流木漁といえますか、流木の下につく魚をねらう漁が多いです。

パンの木は非常に巨大なものですから、子供の頭くらいの大さのパンの実がたくさんなる。

サワルのカヌーというのはこのパンの木でつくるわけです。

一番高いところで海拔四、五メートルというような島ですから、五十年にいったんぐらいいは、台風で島の上を波が越しちゃうわけですね。そうすると、この島は完全に飢えるわけです。タロイモは全滅するし、椰子は倒れるしというような形で、全滅するようなケースが何十年かにいったんぐらいいはあるようです。

そのためには、ほかの島との航海のために、航海技術というのはどうしても保っておかなきゃいけないというような要素があると思いますね。

手斧一本でつくり出すカヌー

チェチェメニ号のような、ああいうカヌーをつくる場合、まずパンの木のてかいのをぶっ倒すわけです。ぶっ倒しまして、一年半ぐらいそのまま倒したまま置いておくんです。木を枯らすというか、乾燥させて、歪みがこない

ようにする。それから一枚一枚、船首の形から何からつくって行く。もちろん設計図とかそういうものは全くありません。手斧一本でつくり出して行くわけです。

現在のところは、釘はもちろん一本も使いません。パンの木をぶっ倒すと同時に、椰子の実を水の中に半年ぐらい漬けておくんです。そうするとこれが腐ってバラバラになります。外側がみんな繊維状になります。これを編みまして、強いロープにする。一枚一枚穴を開けて、それでくくって接合して、船体を組み立てるわけです。

昔は船のそういうものの着色というようなものも、やっぱりここでできる植物染色でやっていたようですけれども、現在はもう、ペンキが入るようになっておりますから、ペンキを、チェチェメニ号の場合も外側はペンキでございます。

それから帆でございますけれども、帆はパングナス（タコノキ）という植物がありますけれども、その葉を織って、数十センチ幅の長い帯状のマットをつくりまして、それを縫い合わせて一枚の帆にする。

チェチェメニ号の場合もつくらせましたけれども、現在はやっぱりナイロンとか、そういうものが手に入るようになりまして、これは帆走効率が全然違いますから。チェチェメニ号の場合

はとにかく伝統的な帆をつくって、サワルを出発する時と、沖繩に入る時にこれを使おうじゃないか、中途はナイロンの帆で走ろうという形でやりました。

こういうカヌーを製作する場合には、全部同じように見えますけれども、船首の形が、前後とも同形ですけれども、その形の島によって全部違うようですね。

これはどうも、誰がつくった彼がつくったということよりも、島で違うようですね。決まっているようです。何を表すかという、鳥を表しているといっておりました。できるだけ早く走れよというような意味が込められているんじゃないかと思えます。

こういうふうな船をつくりましますけれども、チェチェメニ号の場合は、私がサワルにおりましたのは、約二カ月、パンの木を切り倒してから完成させるまで、二年も三年も、時には十年ぐらいかかってつくっているように、のんびりやっておるわけですから、とても間に合いません。ですから、チェチェメニ号はすでにあった船でございます。

カヌーはそれぞれ島の所有じゃなくて、個人個人が所有しておるといってもです。サワル島で、十二隻ありましたかね、当時。チェチェメニ号クラスの遠洋に耐えられるというのが三、四隻、それからつい島の向うに魚を見

つけて出て行って、獲って帰るといような程度のが七、八隻というような程度でありました。

チェチェメニ号は、あの場合の、航海の時の副船長格でありました、これも島の名家で、酋長につながる人ですが、この人が所有者で、つくった時に、奥さんと喧嘩をして、チェチェメニ、チェチェメニと叫んだと。よく考えろとか、よく覚えろとかそういう意味だといっていましたけれども、それでチェチェメニという名前にしたというんです。でも日本に行くんなら、沖繩丸とかなんとか、ほかの名前を付けようかなんていつていたんですけれども、いや、そのままのほうが面白いだろうということ、その名称をそのままもらってきたんです。

ルッパンが当時四十八歳でございましたが、十一年前で四十八。一番年長が五十八歳でヤレマイというおじさんがいたんですけれども、それが最年長で、ルッパンは四十八歳だと思えます。なんといいますか、その年頃の人たちっていうのは、やはり日本の教育を受けていますんで、日本の軍歌なんかはすぐよく知っています。もう日露戦争の時代の軍歌を、うちの若いスタッフが何もわからないものまで知っておりますね、毎晩それを歌っているんです。

カヌー小屋単位の社会生活

男たちの日課としては三時にカヌー小屋に必ず集まってくるんです。そこで朝つくりはじめた椰子酒を飲むんです。海岸にカヌー小屋が、六つばかりあるんです。ニッパヤシのでかい小屋ですね。東側にはあまり浜がありませんので、部落が全部西側にあり、その前に必ずカヌー小屋がある。村の全家族がどこかに所属しているんですね。原則としてこのカヌー小屋には女は入れない、男だけしか入れない。

そのカヌー小屋にそれぞれグループが集まりまして、みんなが自分の今朝仕込んだ椰子酒を一升壺に、どういうわけか一升壺があるんですね。一升壺に入れて、ここに集まってくるわけです。三時に必ずお酒を飲む。

このお酒を飲むのが面白くて、コップが一個しかないんです。ついでもらってキューッと飲んで、次に渡して、キューッと飲むと、こういう形でとにかく一巡して、まだ酒が余っていたらもう一巡するというようなスタイル。そこでどうなのか、大きい声で話すことは非常に下品なこと、囁くようにですね、耳越してクシャクシャ、クシャクシャと話すんですよ。それですべての村のことが、そこで決まる。ですから、その時、チュチュメニで来た

のも、このカヌー小屋のメンバーがやったということですね。

われわれもこのカヌー小屋へずーっと泊まっていたんですけれども、大きい屋根があって、下はもちろん砂でございまして、壁のない吹き抜けの小屋ですけれども、そこに船が何隻か入れているんです。すべてカヌー小屋の単位で社会生活は行われているということですね。

面白かったことは、ちようど私たちがいいよいよ出港しようかという時に、村中集まって、お別れの宴があったわけですから、豚を殺そうかということになりました。豚がそのへんにゴロゴロ、椰子の木の下に寝ていて、時々椰子が落っこってきて、豚に当たる。ちようど私も真横にいたんですけれども、大きい豚に椰子の実が直撃して、気絶しましてね。そうしたらみんなが寄って、気絶して、まだこれはすぐ生き返るよといっているのに、もう殺しちゃうんですよ(笑)。死んだ死んだといつて。

女性は悲しい時に頭を丸める

やっぱり出る日にちというものも、なかなか決定できないんです。これはルッパンの秘伝で、星がどのように上がつて来るとか、いろいろあるんですけれども、われわれがいくらその説明

を求めても、それは説明しないんですね。できないところもあるんでしょうけれども、とにかくまだだめだ、まだだめだというんです。

われわれもイライラしましたけれども、やっと出るという時になりますよね、急にあした行こうという話になるんですけれども、島の女たちが浜辺に出て来てやっぱりずーっと泣くんですね。みんなにウコンの黄色い粉を身体中に塗ってやってですね。あんな愁嘆場になるとは思いませんでした。もう少し元氣よく行ってくるぞって出るかと思ったら、泣きの涙の出港です。

男も泣いているんですよ。女は悲しいことがあったりなんかすると、頭をバリカンで刈って丸坊主になりますから、丸坊主にした女がいっぱいいて、愁嘆場がありましたけれども、まあ、なんとかして出掛けたいわけなんです。

方位の決め方は、どうも、カヌーのある部分、どこそこを船首の飾りと真直ぐにして走れば、サイパンへ着くというような形で出るようですね。ですが、島を一旦出ちゃったあと、タックなんかして行きますと、星だろうと思えます。星を見て方向を決めるようですね。

サイパンまでの八百キロ、私たちの時は八日間走り抜けました。八日目に「門田さん、サイパンが見えるよ」っていわれた時には、われわれの船の

レーダーには全く写ってないし、われわれが船から見ても全くわからない。このような状態でわれわれ一回も彼らの前に出ませんでした。われわれの行く方向へ付いて来たということはない。伴走船は必ず後ろから行くようにと気をつけておりました。

ただ、南大東辺りにきて、もう、本当に寒くなってきましたから、その時はわれわれが前に出たことがございます。とにかくできるだけ彼らの自主性と彼らの航海術で行ってもらおうという形で、基本的には必ず後ろから付いて行くということにいたしました。

航海中の主要食糧は

ココナッツ

航海中の食糧は、ほとんど椰子です。チュチュメニクラスの船に、大体二百から三百個は積めます。それも三種類の椰子を積みますけれども、青い椰子と少し熟れて来て中のコブラができている状態の椰子と、それから完全に水気がなくなつてコブラだけの椰子と、その三種類、綺麗に積み分けますけれども、青いのは水分を補給するためのもの。中位に熟れたのは、水分を補給すると同時にコブラを食べる。枯れた椰子はコブラを食べるのと同時に、燃料にするわけです。外側がカサカサになっていますから。

カヌーには必ず砂を積んでおりまし

で、砂の上で焚火をして、枯れた椰子殻はその時の燃料にする。燃料というのは魚を焼いたり、時々、海鳥なんか採れますから、そういうものを焼いて食べたりというようなことですね。料理する時は、走りながらやっている場合もあります。ただ、安全のためあって、私は夜は走るな、夜は寝ろといっておきましたんで、夜は寝ていたようです。

私たちのふじや丸に、三日にいったんか四日にいったんはインスタント・ラーメンみたいなものをくださいといっておきますから、渡したりはしましたけれども、彼らは、基本的には椰子だけでやってこれると思います。

それからパンの実で餅みたいなものもつくりますけれども、こういうものは持ったとしても一週間かそこらですから、長期の航海には役立ちません。

彼らとしてみれば、何日間で行かないやならんとか、そういうことは全くないんで、途中で島があれば一カ月でも二カ月でもそこで美味しいものを食べて、天候を見定めて、また星の具合がよくなれば行けばいいやということですからね。そういう形で行けば、確かに、待てば海路の日和ありじゃありませんけれども、本当に、こんなカヌーで行けるかと思うような大航海も、あの船で可能だろうと思いますね。

カヌーにはなぜ甲板がないか

皆さまカヌーについては、よくご存じだろうと思いますけれども、前後はとにかく同じ形で、前後に穴があってそこへボンと帆柱を突っ込めば前になり後ろになりするだけです。バックする時には、これを引っこ抜いて、後ろに持っていったボンとやれば、後ろに走りだすということです。非常に能率的にはいいカヌーですね。

ただ、甲板がないですから、なぜ甲板をつくらないのかなということをいろいろ考えましたけれども、基本的にはやっぱりどんな水が入ってくるのを、どんなにかいて出して走っているわけですから、むしろ甲板があると、そういう作業はできないんじゃないかなるかと思いました。

荒天の時にはカヌーに水を入れて沈めちゃいますからね、そのまま流木と同じように浮いていて、自分の身体はそれにつかまっていればいずれば嵐が収まるというわけです。たぶん風波の抵抗は少ないはずですね。水面に浮かんでいるわけですからね。沈没ということは全く考えないで済むはずですから、非常によくできたものだと思います。

出港しまして、初日はウェスト・フアイユ島で一泊して、海亀を採ったり、

いろんなことをいたしまして、サイパンまでは全く順調な航海をいたしました。

ところがサイパン島に着いてからが大事（おおごと）でございましたね。十九世紀の末に、高波でサタウル島がほとんど全滅した時代があるんですね。その時に随分サイパンに逃げているんです。ですから、サイパン島にはサタウル島出身者という一つのグループがありまして、彼らは、その人たちのところへ毎日毎日、終日飲みに行つて泊まってくるわけです。サタウルから来て、これから日本に行くんだというので大英雄ですから、彼らはそのサイパンの親戚のうちに毎日泊まりに行くんです。

それで椰子酒飲んで毎日大騒ぎです。あれでサイパンに何日おりましたでしようか。三、四十日近く。

いろんなことがあったんです。たとえば当時のサイパン政庁がパスポートを出さないわけですね。サイパンまではなんというわけではないわけです。あれから先というのはパスポートをつくれないわけですね。これも、お前たちは正式には本当に海洋博に行くのかというようなことから始まりましてね、パスポート出さないと。

秋元さんという日本の領事の方がいらっしゃいまして、この方に非常に奔走していただきまして、日本のビザも、

臨時にとつてくれまして、パスポートという段階になったんですが、またこれで写真が要するというわけです。

もちろん写真がないから、写真を撮らないかんわけですね、サイパンで。そうすると、盛装しますと、彼らは全部、花輪を必ず着けるんですよ、サタウルの人には男もなんかの時には。

それをつけて撮ったらこれは認められないと（笑）。もう一回撮り直しとか、とにかく三十何日かかりまして、やっとサイパンを出ることはできたんですけれども、これから先は彼らもちょっときつかったようです。火山列島を北上しますと、やっぱり冬ですからね。あの北端辺りが魔の二十度線ですか、いろいろ風の吹くところですから。

最後の十二日間が

一番つらかった

沖縄海洋博本部会場に着いたのが十二月の十三日ですから、十一月の後半から十二月にかけての、あの付近の通過です。かなり天候も悪かったし、時化もしましたし、彼らもつらかったはずですね。しかし幸いにして一人の事故もなく沖縄へ来れました。

沖縄へ着いてからは大変でございました。もう、ぼくは沖縄へ着いた途端に、彼らと一日も会えないぐらい、もうどっかへ持って行かれちゃって（笑）。歓迎会だのなんだのって、大いに歓待さ

れました。

彼らの航法というのは、ある緯度のところまで行こうと、とにかく上がっちゃって、それから真西に行けば日本列島へ行くんだと。そういう理解の仕方ですから、決して三角形の最短距離を行こうというのではなしに、まず北に行って、それから西へ行けばいいんだというような形です。

まず、モウグから小笠原まで上がって西に行くか、それとも南大東を目指して沖縄へ行くかというのは、かなり議論をしましたけれどもね。ルッパンは小笠原まで上がってから行こうかというような考えを持っていたようですが、私たちがやっぱり、時間的

にかなり損になるからというんで、モウグから南大東を目指して行こうという主張をしたんです。

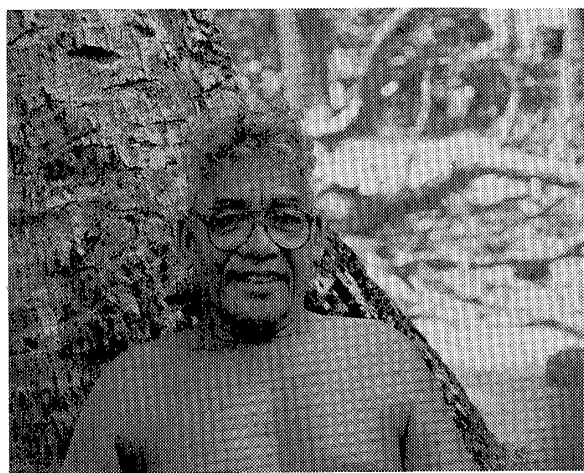
モウグから沖縄までは十二日間ございました。

その間がルッパンも一番つらかったでしょうね、島がありませんからね。それまではなんだかないながら、火山列島で点々とマリアナ諸島がありますし。かなり心細かったんじゃないかと思えますね。しかし、その間、一回もふじや丸へ上がらしてくれとか、そういうことはいつてきませんでしたね。ただ、ウイスキーくれとか（笑）、そういう注文がだいぶ出ましたけれども。

そうそう、こういうことは何にも触れていませんけれども、ぼくはサイパン政庁から、日当取られましたよ。彼らに一日幾ら払ってやれて。それでルッパンは忘れているかと思ったら、沖縄へ着いたら、ちゃんと請求しましたからね（笑）。

日本のお金で、確か千円かそこらじゃなかったかという記憶がありますけれどもね。これはもちろんルッパンたちがくれといったわけじゃなしに、政府にそうしろということをいわれました。

司会 門田さん、まことに貴重なお話をありがとうございました。さて、



キャプテン・ルッパン
(一九八七年、ヤップにて)

きょうは、キャプテン・ルッパンとは

マキ公学校時代からの幼な馴染の大橋旦さん（太平洋学会誌第30号参照）もご出席ですので、この辺で、日本到着後のルッパンさんたちの話を含めて、大橋さんにもお伺いしたいと思います。

大橋さんは、あの時、ルッパンさんたちが、沖縄から東京に来た時に、お会いになったんですね。

大橋 そうです。彼らもやっぱり、沖縄までの寒くなつてからがつらかつたといっていましたね。

門田 十二月ですもんね。私も、台風シーズンの前の、五月か六月にやりたかつたんです。ただ、資金的な面とか、そんなものが間に合いませんで、ポストモンスーンになっちゃって、それから、サイパンの政庁とか、いろんなところで許可問題で滞留させられるとは思わなかつたもんですから、十月ごろにはなんとか、日本に帰ってくるなと思つたのが、十二月になつちやつたんですけれども、かわいそうでしたよ、それは寒くて。

大橋 舵をとる男が、水の中に足をつけて舵を押さえているのですが、その水に入れている足が冷たくて、もうこらえ切れなくて、だから、交替を頻繁にやらないとならなくて、それが一番つらかつたといっていました。

門田 最後尾にいる人間が、舵を持ちましてね、舵を押さえるために、必

ず片方を水の中に漬けている。

大橋 私の聞いているところでは、舵の固定がしっかりしていないんで、足で押さえているんだと、かなり力があるんで、足で押さえているんだということでした。

門田 ええ、それは前後ともに全く同形のカヌーでございますから、帆をこっちへ持ってきて、こっちを頭にした場合には、舵も移動しなきゃいけないですね。両方に舵があるわけじゃないから、横に舵を支える場所があるんですけれども、そこへロープ一本で引っ掛けておくだけで、手で握って足で押さえていないと、あれはポロンと流れてしまうという状態ですから。そういうようなことで、舵取りの足はかなり冷たかつたと思いますよ、それは。沖縄といひまして十二月でございますからね。

司会 これはルッパンさんから直接聞いた話ではなくて、ロボマンさんから聞いた話なんですけれども、サイパンにいた時に、ルッパンが台風が来るという予測をしたというんですけれども。

門田 それはありましたよ。そして、どうしてそういうことをいうのっていったら、星だつていましたね。台風の星がいま水平線から上がって来てい

るから、二、三日うちに必ずあると。そうしたら確かに来たことは来ました(笑)。

司会 ルッパンさんは、夕方、日が沈んで真暗になった西の空と、太陽が上る前の東の空を見て、二十三だかの星を見ると、天気がわかるということをしていました。

門田 二十三かどうかわかりませんが、けれども、それぞれの星に風の吹く星だのというふうに名付けていますね。そして方向はもう全部星で出るように、この星とこの星との中間を行けば何島に行くんだというようなことは、スター・コンパスといいますが、彼らはそういうものは頭の中に入っているようです。かつてマーシャルにあった竹のチャートは、あれはサワルでは一切使っていないといっていました。

質問 サイパンから沖縄に向かう方角は、どういうふうにして決めるのですか、われわれの持っているようなチャートに基づいて方角を決めているんですか。

門田 いえいえ、チャートは持っていません。どういう形でやったかという、西に向かうには、とにかく北極星を右手に見て走るんだと。そうすればいずれにしても沖縄に当たらないで中国大陸に当たる。そういう世界地図の認識が頭に入っているよ

うですね。

質問 それはもちろん教えられての知識ですね。

門田 そうでしょう。やっぱり少年の時から、そういうことを伝承されてきているんだと思います。息子に伝えるんだといっていました。

司会 以前、大橋さんにルッパンが話した時は、息子でもバカだったら教えてもしようがない、一回聞いたら一生覚えていような賢い子供でないと、自分の子供でも駄目だといったそうです。

大橋 ええ、やっぱり頭のいい子でないと教えられないといっていましたね。

門田 ルッパンというのは、頭のいい男ですよ。

大橋 いいですね。それからサイパンではつらかったらしいですね。やっぱり自分の目が悪くなったといっていました。

門田 ほう、そうですか。

大橋 星を見て、若い時に見えた星が見えなくなった。つまりみんなが見える星の、その向うにまた星があるというわけですよ。それが見えるか見えないかが問題なんだけれども、それがなかなか見えなくなって来た。俺は年だから目が効かなくなったと。だから、若いものに早く教えたいといっていますね。

したね。

門田 そういう弱みは全然われわれには見せませんでしたね、そんなことをいっていましたか。

大橋 サイパンでは、ほかの事情もあったんでしょうけれども、ルッパンがなかなか決断できなかったのは、結局、見えなきゃならないものが見えない。それが見えないうちはやっぱり自信をもってゴーといえなかったらしいんです。

門田 ああ、そういうことがあったんですか。

司会 私がルッパンさんに、本当に嵐になった時はどうするんですかといったら、さっき門田さんのお話になった、カヌーを沈めるんだという話をしてくれましたね。どうやって沈めるんだって聞いたらすね、帆だとか柱だとか全部縛ってカヌーにくくりつけて、そしてあとは、みんながアウト・リガーの腕木のところに乗るといいましたね。そうすると自然に水が入って、それで沈むんだというんですよ。ただ、私は天候は一週間ぐらいは先までわかりますから、絶対に嵐に遭いせんなんていっていました。

門田 そうだと思いますよ、確実に一週間お天気だということでない限りは、彼らは出ないんでしょうからね。経済効果とか、いろんなことを考えて、

何日までに着かなきゃいけない、そんなことは全く関係ない話ですから。

質問 チェチェメ二号の航海は、記録としてはどういう本になっていますでしょうか。

門田 本は、私が書かされたんですが、けれどもね、その出版社がぶれちゃいましたね。

出版社に原稿を渡して、出版社がぶれちゃって、原稿がどこに行ったかわからないんです。

ですから、チェチェメ二号について書いたことは、私の弟がやっぱり伴走船に同乗しておりましたので、それが民族学博物館の雑誌にちょっと書きまして、あれしかなと思います。私は映画屋ですから、映画つくればもうそれでいいのですけれどもね。

質問 椰子ロープはどのように作るのですか。

門田 若い椰子の実をとにかく一カ月ぐらい水に浸しておきましてね、水に浸しておきますと、グザグザになるんです。それをザッとふるいますと、繊維状のものになりますから、それをより合わせて、それをまた、細いのを何本もより合わせて、太いロープはつくって行くんです。

質問 水に浸けるのは、海岸のところの窪みかなんかに入れるんですか。

門田 いえ、島の真ん中のタロイモ畑のほうにそういう場所がつくってありましたね。海水じゃ、やっぱり痛みがあるんじゃないでしょうか。真水でやっていました。

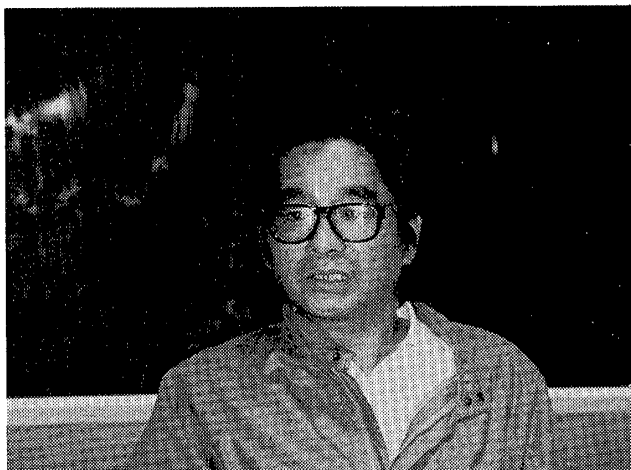
司会 真水のほうがむしろ早く醗酵するんですね。あれは醗酵させないとバラバラにならないようですね。

門田 そうだと思いますね。よんだ水の中に漬けておりました。

質問 チェチェメニ号は、こちらに来る前、何年ぐらい前につくられた船なんですか。

門田 二年ぐらい前だと思います。

司会 ただ、いよいよ航海をやる前



門田龍太郎氏

に全部ばらして、もう一回縛り直すんですね。

門田 そして、部分的にはどんどん板を入れ替えたりいろんなことはしています。

司会 大橋さん、ルッパンさんの本当の年はどうなるんですか。

大橋 正確ではないかもしれませんが、私がいまちょうど満で六十一になったんです。そうするとルッパンは六十三ですね。私が大正十五年生まれで、彼が十三年生まれのはずなんです。

門田 いやいやそんなことはないですね。ぼくは今度来る前に、もう一回、念のために民博のチェチェメニを見てきたんです。沖繩に着いた時に、四十八歳と出ています。

大橋 そうです。東京で会った時に、パスポート見せてくれたんですよ。それを見たら、私より二つばかり若くなっているんですよ（笑）。

それで「ルッパン、なんだサバ読んでいるじゃないか」っていったら、いや、ぼくたちは本当の生年月日はわからないんだけど、パスポートをつくる時に、いえいえって言うから、しょうがないからいいかげんなことをいった。だけど、確かに、ぼくはお前より二つ上だと。それは子供の時そうだったんですからね。だけど、それはもうそう

いうことですから。

司会 だから門田さんの記録では、パスポートの年齢になっているわけですね。実際にはそれよりは四つぐらい上だと。

大橋 そういうことです。だからあの時、四十八歳だったらすね、五十二歳できたんですね。だからいま六十三歳。

司会 なるほど。大橋さんは十歳前後のころと一緒に遊んでいるから、向うが年が上だということははっきりわかっていていいですね（笑）。

大橋 それはそうですよ（笑）。向うも俺はまだお前、弟だと思っているよっていうし、こっちも遊んでいた時がやっぱりルッパンが兄貴分で、遊んでもらっていたんですからね。

質問 日本ヤップ友好協会の積さんは、あの時のチェチェメニの航海にはどういう役だったんですか。

門田 日本ヤップ友好協会というところを通して、ぼくはロボマンと知り合ったんです。確か、私たちは全然別な仕事でヤップヘロケーションに行っていた時に、日本ヤップ友好協会を通さないと、ヤップじゃ仕事ができないよみたいなのを積さんからいわれて、では、おたくの会員になりましょうということで、だから名目主催は初めは日本ヤップ友好協会だったんです。とこ

ろが日本ヤップ友好協会というのは任意団体で、力もなんにもありませんから、結局はなんにもしなかったんです。

大橋 しかし、あの映画はいい映画でした。私も昔、映画界にいたもんですから、よかったなと思ってね。

門田 恐れ入ります。どちらのほうにいらしたわけですか。

大橋 昔、清水宏っていう監督がいましたが、従兄弟なんです。そこにずっとくっついて助手のようなことをしていたもんですから、ヤップの子供の時の思い出を撮りたい話があった。それで話したことがあるんです、従兄弟に。そうしたら、もう従兄弟も年取って晩年ですから、それでうちのカメラ持っていて、お前やってこいっていわれましたけれども。その時、思い切ってやればよかったと後悔しております。

門田 清水宏さんというと、田中絹代さんの旦那さんですよ。そうですね、そんなことがございましたか。

質問 島を出られる時、男も女も泣いていたというお話でしたけれども、宗教的なお清めみたいな、なんかそういう行事といえますか、そういうものがあるんですか。

門田 行事というほどのことじゃなくて、出る前の日は、それこそ夜遅く

まで浜辺で椰子酒を飲んで、ルッパンが挨拶をして、いまから行くぞというような演説をぶって、みんなで椰子酒を飲みながら遅くまで砂浜で話していましたけれども、特別にどっかにお参りしたとか、そういうようなことはなかったようでした。

質問 ふじや丸は、どのぐらいの距離をおいて伴走したのですか。

門田 やっぱりに常に視界に入る範囲ということでしたが、ただ、撮影のいろんな条件によって近寄ったり、遠のいたりしました。

司会 来年、ルッパンたちによるサタワルから福岡市までの航海が計画されているのですが、門田さん何かアドバイスはございませんか。

門田 そうですね、もしまたおやりになるとすれば、かなりの準備をしてからやらないと、ルッパンも六十を越えていますし。なんだかんだいってもやっぱりチームワークだと思えますから、決して寄せ集めや、よその島の船にルッパン一人乗っけても、うまくは行かないと思います。彼の子飼いいいか、カヌー小屋の仲間の中で選抜をして来ないといけないと思いますね。それに時期的には、やっぱり温かい時期に日本に着けるようなスケジュールにして、台風前に、時期を選んであげることだと思います。

それからあともう一つは、彼らの思うようにさせてやることで、これだけなら何日間であらうという日本人の見通しで、それに合わせてやれということになる、事故のもとになるような気がします。十分に余裕を見るべきで、日本人の頭で考えるスケジュールでは、決してできないと思います。

誰がやるったって、経験者はいないわけですから、ルッパンだって、そういう意味じゃ、決して全能の男じゃございませぬから、やっぱり条件の悪いことをやらせれば失敗することもあるでしょう。

あの時は無我夢中でやりましたけれども、今度おやりになる時には、やっぱりかなり慎重に、余裕をもってやらないと。失敗すると人命にかかわりますから。

われわれの時以上に彼らも年を取っているし、その後、若い優秀な航海者も出ているでしょうが、だけどルッパンぐらいの経験を積んだ男はいないですね。そして、彼は日本に来たがうでしょうね。

大橋 この前は、本当に帰るのがつらかったようでした。もったいなかったようでした。それと来る時にサイパンにひと月もいて、サイパンのサタワル出身者に随分世話になったでしょう。帰りにどうしてもサイパンへ寄っ

て挨拶をして帰らないと、自分としては気が済まないわけです。

ところがね、そのサイパンへ寄ると金がかかるということで、ルッパンは自分だけでも代表してサイパンに挨拶に行きたいということだったんですけれども、それが認められないといつてね、本当に泣き出しそうな感じでした。

門田 とにかく日本に着いた瞬間から私の手を離れまして、海洋博協会がパツとかつさうようにして持って行って、ぼくらは翌日の飛行機で沖繩から帰ってきたのですが、彼らが東京に来て、ぼくに会う時間がないんです。やれ三木首相に会うとか、なんととかんとかって引っぱり回されて、全然会う時間がない。

機械のごとくスケジュールを消化させられて、まあ、いろんなものはくれたそうなんですけれども、海洋博の出版企業がね。缶ビールまで飛行機に積んで持って帰ったという話です(笑)。

だから、一回、夜中の十一時ごろ、彼らの宿舎に行って会った時には、彼らはゲッソリしていましたね、ひっぱり回されていて。だから、かわいそうなことをしたなと思いました。彼は帰りはふじや丸で送ってくれていていたんですよ。

結局、それもできずに、確かあの時は、日本航空がグアムまで、ただで送ってくれたんですよ。しかし、事務的

なやり方をしたんでしょうね。もらったおみやげかなんか、全部積んでやって、ただで帰したということ聞きましてから、やることはやったんですよけれども、日本人的に機械的にやっちゃったんでしょう。

当時サイパンには、日本航空は行ってなかったんですね。グアムへ直行だったんです。

大橋 それでルッパンは、ロボマンさんになんとか行かしてくれて頼んだ。あの時、ロボマンさんも日本に来ていましたからね。それでロボマンの許可が下りないって、つらそうでしたよ。

彼は手紙でお礼するということを考えない。もちろん直接会って、お礼はしたいんですけども、とにかくサイパンに行かなければ、ほかにお礼のしようがないように思っちゃっているわけです。

そういう点は非常に義理堅い面があるんだなと思って、本当にかわいそうになりました。

司会 門田さん、『チェチェメニ号の冒険』という映画は、海外でもツールの国際コンクール・グランプリを獲得されるとか、国内でもキネマ旬報ベスト・テン第一位とか、ずいぶん、いろいろ賞をお取りになりましたですね。
門田 そういう意味じゃ日本におけ

る映画祭は全部取りましたね、一位になりました。当時、ああいう映画は珍しかったものですから。それから文化庁の優秀映画奨励賞。それから文部省の特別選定、それから優秀映画鑑賞会の特別選定、その他日本ペンクラブとかなんとか、日本にあるものはみんなもらいました。文化庁の優秀映画奨励賞というのは、劇映画その他の、あらゆる映画を含めて年間十本につき一千万円ずつくれる制度なんです。文化庁優秀映画奨励金というのが、その十本のうちの一本に入りまして、もらいましたしね。

司会 そうすると、ああいう映画をおつくりになって大変だろうと思っていたのですが、結構儲かったということですか。

門田 儲かるというところまでは行きませんね(笑)。まあ、投資した分だけ取り返したといえますかね。決してこれ一本でどうこうということではないんですけれども、損はしなかったと思います。けれども、それだって随分たつてからですよ。当初はどうなるかと思っただすよ(笑)。

司会 それはそうでしょうね。初めは私たち、あの映画を見た時は、非常に感激しましたけれども、これは大変なお金がかかっているんだろうと思っ

げないから、映画をつくった方は大変赤字になったんじゃないかなと、心を痛めました(笑)。

門田 これが完成して、コカコーラが、私のところで独占的に配給させてくださいというまでは大変だったですね。それまでは先が全然見えませんでしたね(笑)。いまとなったら、まあ、あの時やっておいてよかったなと思います。いまからやれといわれてもなかなかやれませんか。

司会 門田さん、本日は本当にお忙しいところを、どうもありがとうございます。



新刊 海の果ての祖国

野村 進 著

七十四年前、密猟船に乗り込んだ一人の日本人が、北マリアナの小島に漂着する。その名は山口百次郎。後にサイパン島ガラパンに、南方随一、とうたわれた料亭「よか楼」の主人である。一方は、やがて激しい戦禍に巻き込まれるサイパン・テニアン入植者の一典型と呼ぶにふさわしい、山口同様な形県人の石山正太郎。この両家族を中心として、その南洋での苦闘の足跡をたどりながら、戦争と人間、のテーマに取り組んだルポルタージュである。

戦争とか移民といった急速に風化しつつある素材をとらえ、あえて百五十人を超す証言、取材協力のもと、六年の歳月を費してまとめたという著者の使命感は、四百二十ページの行間を通して、よく感じとることができる。

特に、戦後のマリアナにもあった「勝ち組」「負け組」の争いで、テニアンで暗殺された「リベラルと名付けられた異端者」を自認する百次郎女婿の最後など、新しい史実の発掘もある。

家族とは？ 日本人とは？ 戦争とは？ アリアナ玉砕戦場の実態を、戦後世代の著者の眼を通して、如実に描き出している。

△武村次郎▽
(一九八七年七月 時事通信社刊
四二〇ページ 定価一八〇〇円)

貝の洗い方

太平洋の島々を訪れると、お土産に貝をもらうことがある。その時、「クロリーンに漬けておくとよ」とききれになるよ。やり方は日本のだれか知っているはずだよ」といわれるのだが、帰って来ると、とかく留守中に仕事で溜っていたりして、貝殻はそのまま放ったらかしになる。

たまたま時間があって、クロリーン(Chlorine＝塩素)に浸けてみようと思っても、濃度をどのくらいにすれば良いのか、一体、何時間くらい浸しておけばよいのかわからない。

そこで、長くパラオにおられた武田史朗さん(太平洋学会誌第25号参照)に伺ってみた。

流れのゆるやかなところにいる貝には石灰石が付着しがちなので、これを取るためと、貝の内部に残っている腐敗物などを取るために、塩素系漂白剤に漬けておく。濃度は、ふきんを漂白する時と同じくらいで、時間は数時間。余り長いと内側の光沢が薄れる由。

液から出して歯ブラシのようなものでこすって石灰石を取り、水洗いする。強く付着しているものにはワイヤーブラシを使ってよいが、大量に石灰石が付いているものは、落しても貝殻の光沢がよくない場合が多く、概して無駄な努力になるとのこと。 中島 洋